

紀

要

第 13 号

2000. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き

—地域の検討5. 湖北地域—

瀬口眞司

## 1. はじめに

先史社会の実態や移ろいが地域によって様々であることを、近年の発掘調査はあぶりだしつつある。次に必要なのは、時間と空間の中でその多様性を比較することだ。社会の本質と可能性は、多様性の比較の中からみえてくる。歴史は過去を語るだけのものではない。人類の進路を見出すために、様相の比較を試みていこう。———このような姿勢で、私は仕事をしたい。

そのための準備として、先史社会の俯瞰を我々は試みている。近江における縄文時代初頭から弥生時代前期の社会が最初の対象で、本稿はその第5弾にあたる<sup>110</sup>。

**作業の範囲** 今回の作業範囲は、滋賀県東北部にあたる湖北地域である。通常、長浜市・山東町・伊吹町・米原町・近江町・浅井町・湖北町・高月町・木之本町・余呉町からなる地域が該当するが、地理的に連続する彦根市域の一部も含めて検討する<sup>110</sup>。

**作業の手順と方針** まず、山地・扇状地・氾濫平野・湖岸に近接した氾濫平野（以下湖岸近接地とする）に地形を大別し、遺跡の分布と組み合わせて「地区」を設定する。次に、各地区の動向を整理する。最後に、仮説を含めた地域の展開過程に対する認識を提示する。どのような環境で活動したのか、どのような特性をもつ活動なのか、それらが時間的・地域的にどのように変わるのかといった点に留意し、作業を進める。

**作業上の前提** ①未発掘部分に隠された事実により将来覆される宿命もあるが、あえて全体像の把握を試みる。今回の作業は1999年度段階での到達点と割り切り、新たな事実が現れた際は書き換えることを前提として進める。

②資料の存在を示す場合は「活動痕跡」・「活動の痕跡」と表記する。遺構が無く、数片の土器しか

確認されない遺跡もある。このような資料を他地点からの流入品として除外する考えもあるが、例えば季節的な短期の露营地だったことを示す可能性もある。そこで、今回の俯瞰作業ではそのような資料も「活動痕跡」に含んで検討する。

③時期区分は、「土偶とその情報」研究会1997を改めた表1を用いる。なお、縄文晩期後半の土器と弥生前期前半の土器は、型式学的には分けられるが、近江においてはしばしば共伴するので、時期的には並行するものとして取り扱う。

④意識・無意識に関わらず、人間は選択し、計画を立て、手段を講じながら生活している。このような選択・計画・手段を「生活戦略」として包括し、以下の作業を進める。また、環境には生態的な意味での自然環境と、流通や周辺との関係を含めた社会環境の二者がある。特に断らない場合は二者を含んだ意味とする。

⑤地形・地理は、植生や動物相だけでなく、潜在的な自然環境の豊かさに関わる一次生産量や水との関係も規定する。また、外部と関わりやすい地点とそうでない地点がある。例えば、幾つものルートが交わる結節点や、外部に至るルートの出入り口などは、そのほかの地点に比べ、情報・物資量の流入が多い傾向にある。このように、地形・地理の差は生活戦略に大きな影響を与える。これらのことから、新たな地区での生活の背景には、環境に合わせて生活戦略を変化させたか、当該地区の環境が生活戦略に合致するものに変化したことがあると考えられる。前者の場合を、ここでは適応と呼ぶことにする。

⑥動向を整理する上では、「祭祀装置」・「稀少品」・「搬入土器」・「大規模な土木行為や個人への労働投下の顕在化」といった事象を重視する。このうち「祭祀装置」とは、土偶・石棒・石剣・独鈷石・配石遺構といった祭祀に関わる道具・遺構と従来からされてきたものを指す。また「稀少品」とは、

表1 時期区分

縄文早期	前葉	ネガティブ押形文
	中葉	通常の押型文
	後葉	条痕文
縄文前期	前葉	羽島下層Ⅰ式・蝨Ⅱ式
	中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式
	後葉	北白川下層Ⅱb式～大歳山式
縄文中期	前葉	鷹島式～船元Ⅰ式
	中葉	船元Ⅱ・Ⅲ式
	後葉	船元Ⅳ式～北白川Ⅲ式
縄文後期	前葉	中津式～北白川上層Ⅱ式
	中葉	北白川上層Ⅲ式～元住吉山Ⅰ式
	後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式
縄文晩期	前半	滋賀里Ⅰ～Ⅲa式
	後半	篠原式～長原式
弥生前期	前半	Ⅰ様式古段階・中段階
	後半	Ⅰ様式新段階

近江では普遍的に出土しない黒曜石・琥珀・深海性の貝などを指し、「搬入土器」とは全体の数%しか出土しないか、もしくは胎土が明らかに客体的な他地域の土器を指す。「大規模な土木行為」とは灌漑用水・水田・環濠・方形周溝墓を含む墳墓の造営を指し、このうち墳墓は「個人への労働投下の顕在化」によって生じた結果として取り扱う。縄文～弥生前期の場合、これらはどの地点でも確認されるとは限らないアイテム・事象である。そこで、「有り難いもの」としてこれらを呼称する。

## 2. 地理的条件 (図1)

**概要** 近江は四方を山に囲われている。その山々は幾つかの峠を持ち、また幾つもの河川を生んでいる。諸河川は山々から琵琶湖へ流れ込み、扇状地と氾濫平野を形成した。その一方、周囲に屹立する山々を越えていくルートとしての役割も諸河川は担っている。このような山と河川を中心に据え、当地域の地理的条件をまず概観しよう。

湖北地域は滋賀県の東北部に位置する。東と北を伊吹山地に、西を琵琶湖に区切られる。伊吹山地からは河川によって土砂が運ばれ、上位より扇状地・氾濫平野・三角州が形成されている。

伊吹山地の主峰は伊吹山で、岐阜県揖斐郡との境

にあり、中部高地へ連なっている。

余呉川は敦賀との境に水源をもち、扇状地をほとんど形成することなく南流する。下流に氾濫平野を形成した後、琵琶湖に注ぐ。

高時川は越前との境に水源をもち、杉野川は岐阜県境に水源をもち、これらは中流で合流し、山地を抜け出た地点に扇状地を形成して、その下部には氾濫平野を形成する。湖北平野を南流の後、付け替えられた姉川と合流する。その扇状地は姉川扇状地と接するものではなく、その端部同士は離れている。従って、扇端部の湧水点を結ぶ線は、この高時川扇状地の東端と姉川・田川扇状地の北西端との間で途切れる結果となっている。

田川は伊吹山地に源をもち、小規模な扇状地を形成したのち、姉川扇状地の裾を南流し姉川に合流する。その扇状地は姉川扇状地と接するものではないが、その端部同士は非常に近接している。

草野川は別名妹川とよばれ、奥伊吹に源をもち、南流して姉川に合流する。その小規模な扇状地は、姉川の扇状地と複合する形で形成される。

姉川は伊吹山地の南東部に水源をもち、南流の後、草野川・高時川をあわせつつ西流し、琵琶湖に注ぐ。中流部では扇状地を形成し、幾筋もの旧河道の痕跡を残す。現在の流路は後に付け替えられたもので、かつては、この旧河道に本流が流れていた。本稿では、この旧河道を姉川本流と見なして話を進める。その下流では氾濫平野が形成され、これらを合わせた沖積地は湖北平野の大部分を占める。かつては天野川に合流していた時期もあったと推定され、横山山地東方の大原野はその扇状地とされている。

最も南に位置する天野川は坂田郡山東町柏原菖蒲池に源を持ち、諸々の小河川を集めて北流の後、伊吹山の南面を南流する。西流した後、氾濫平野を形成しながら琵琶湖に注ぐ。最下流にまで山塊が迫っており、最下流の沖積が遅れた。そのため、この周辺には入江内湖など多数の内湖が存在しており、現在の見かけよりかなり低湿な地点であったと考えられる。

**留意点** 留意点の第1は、想定される主要幹線のあり方である。まず次の3大主要河川がこれに想定できよう。越前に通じる余呉川、中部高地に通じ

る姉川、伊勢湾方面に通じる天野川とその地溝帯は、遡上することにより、中部高地や伊勢湾といった外部へ通じる重要なルートとなりえる。特に天野川地溝帯は、山越えルートに比べ往来がしやすく、現在でも名神高速道路・東海道新幹線・JR東海道線といった動脈が通っている。いわば、西日本の玄関口の一つである。

これら河川とは別に、各扇状地の扇端部沿いのルートも重要である。この線上には湧水点が連続しており、そのために集落が形成され、それを結ぶ道が敷かれた。部分的に断続しながら、湖南地方から湖東地方を経て、湖北地方まで近江を縦断する。東山道・中山道、あるいは湖北地方では北陸街道などと呼ばれるこれらは陸上の動脈となっている。同様に天野川から伊吹山西南麓扇状地をおそらく湧水点に沿って横切り、杉野川（高時川）扇状地先端部沿いを經由して余呉川に至るいわゆる「北国脇往還」も重要なルートとなっている。これらのルートが活動の実態や移ろいにどのように関わるかが注目されよう。

留意点の第2は、湖北最大を誇る姉川下流域扇状地の土地条件である。隣接する犬上川扇状地は礫がち堆積物からなっており、排水には長じているがほとんど滞水しない。姉川扇状地は砂がち堆積物からなっており、排水は前者に劣るものの滞水性には比較的富んでいる。この姉川扇状地の特性が生業形態に大きな影響を与えた可能性は十分想定できる。展開過程の地域間の相違を考える上で無視できない点であろう<sup>110</sup>。

### 3. 事象の整理

#### A. 地区の設定

遺跡の分布と立地から、大別11地区・細分21地区に分けられる（図1・表2）。

#### B. 各地区の内容と消長

各遺跡の詳細は表3にまとめ、消長は表4に整理した。ここでは、各地区の内容について記す。なお、地形類型や表層地質は1984年国土地理院発行の『1:25,000 土地条件図 彦根』などによった<sup>111</sup>。

**1 地区：葛籠尾崎湖底遺跡(1)** 縄文早期から晩期の各時期の遺物が出土し、搬入系土器（加曾利

B式など）や多数の完形土器も出土するが、水深70mの湖底谷に位置しており、居住地の痕跡とは考えにくい。特殊な面が大きいので、今回はその評価を保留する。

**2 A 地区：余呉川上流域地区(2)** 余呉川上流の段丘を中心とした範囲で、礫がち堆積物(Gravelley sediment, 以下同じ)が表層地質の主体をしめる地区。柳ヶ瀬遺跡(2)で縄文中期の土器が出土する。

**2 B 地区：余呉川中流域地区(3~5)** 余呉川中流域の扇状地および山中傾斜地を中心とする範囲で、礫がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。縄文早期中葉(坂口遺跡(3)・黒田長山遺跡(4))、縄文後期後葉(桜内遺跡(5))の資料がみられる。その間を埋める資料は現在確認されていない。

**2 C 地区：余呉川下流域地区(6~10)** 余呉川河口付近の湖岸近接地一帯に分布する。表層地質は泥がち堆積物(Muddy sediment, 以下同じ)が主体をしめる。古くは縄文前期後葉(延勝寺湖底遺跡(6))、新しくは縄文晩期後半(同遺跡)の資料が検出されている。尾上浜遺跡(7)では縄文後期前半の丸木船などが出土した。

**3 地区：余呉湖底地区(11)** 余呉湖周辺で、礫がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。余呉湖底遺跡(11)の埋没林から縄文後期後葉の土器が出土した。

**4 地区：高時川流域地区(12~18)** 高時川流域の山中傾斜地・段丘・扇状地を中心とする範囲で、礫がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。古くは縄文中期後葉(古橋遺跡(12))、新しくは縄文晩期前半(洞戸朱塚(16))の資料が検出されている。古橋遺跡(12)・川合遺跡(14)・井ノ口日吉遺跡(17)で石棒が確認されている。

**5 A 地区：田川流域地区 A(19~21)** 田川流域の扇状地を中心とする範囲。表層地質は砂がち堆積物(sandy sediment, 以下同じ)と泥がち堆積物が混着する。北野 A 遺跡(19)で縄文晩期後半の資料が確認されているほかは時期不詳である。高畑遺跡(20)・瓜生元遺跡(21)で石棒が確認されている。

**5 B 地区：田川流域地区 B(22)** 田川流域の氾濫平野を中心とする範囲で、砂がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。時期は不詳だが、木尾遺跡(22)

表2 湖北地域の細分地区

1地区：葛籠尾崎湖底遺跡(1)			
2地区：余呉川流域地区	2A：上流域(2)	2B：中流域(3～5)	2C：下流域(6～10)
3地区：余呉湖底遺跡(11)			
4地区：高時川流域地区(12～18)			
5地区：田川流域地区	5A：扇状地と周辺(19～21)	5B：下流域の氾濫平野(22)	
6地区：草野川流域地区	6A：上流谷底平野(23)	6B：中流扇状地(24)	
7地区：姉川上流域地区	7A：最上流山中傾斜地(25・26)	7B：上流の山中傾斜地や段丘(27・28)	
	7C：上流土石流段丘(29～31)	7D：扇状地(43～57)	
	7E：氾濫平野・湖岸近接地(58・63)		
8地区：伊吹山頂遺跡(32)			
9地区：藤古川上流域地区(33)			
10地区：伊吹山麓地区(34～42)			
11地区：天野川流域地区	11A：中流域(64～71)	11B：下流域右岸湖岸近接地(72～81)	
	11C：下流域砂岩湖岸近接地(82・91)		

で石棒が出土している。

**6A地区：草野川上流域地区(23)** 草野川上流の谷底平野を中心とする範囲で、礫がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。時期は不詳であるが、草野遺跡(23)で石棒が出土している。

**6B地区：草野川中流域地区(24)** 草野川中流域の扇状地を中心とする範囲で、碎屑物(Detritus、以下同じ)が表層地質の主体を占める地区。醍醐B遺跡(24)で縄文中期中葉～後葉の資料が出土した。特に中期後葉には立石を伴う配石遺構や石棒、各種石器、黒曜石製の石鏃などが確認されている。

**7A地区：姉川流域地区A(25・26)** 姉川上流の山中傾斜地を中心とする範囲で、破碎物ないし砂岩・泥質岩互層(Alternation of sandstone and argillaceous)が表層地質の主体を占める地区。起し又遺跡(25)で縄文早期中葉、縄文中期前葉～後期後葉の資料、配石遺構・石棒が確認されている。

**7B地区：姉川流域地区B(27・28)** 姉川上流の山中傾斜地や段丘を中心とする範囲で、表層地質は礫がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。内座遺跡(27)で縄文後期前葉・中葉、縄文晩期前葉・後葉の資料が確認されているが、そのほかは不詳である。

**7C地区：姉川流域地区C(29～31)** 姉川上流の土石流段丘を中心とする範囲で、碎屑物が表層地質の主体をしめる地区。伊吹遺跡(29)で縄文中期・後期・晩期の土器、線刻石剣や蛇文岩製の精製磨斧

が確認されているが、そのほかは不詳である。

**7D地区：姉川流域地区D(43～57)** 姉川旧下流域の扇状地を中心とする範囲で、砂がち堆積物と泥がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。網流する旧河道沿いに遺跡が分布する。縄文早期後葉(八反田遺跡(43))～弥生前期後半の資料がみられる。祭祀に関わるものとして、神照寺坊遺跡(47)では形態や法量などみて中期に属すると思われる石棒が、山階遺跡(51)では縄文後期の独鈷石が出土している。川崎遺跡(45)では縄文前期中葉、縄文中期前葉、縄文後期前葉の資料のほか、縄文晩期後半から弥生前期後半までの資料が出土している。口分田北遺跡(53)では溝状遺構から縄文晩期前半・後半および弥生前期後半の資料が出土している。宮司遺跡(52)では谷地形部から滋賀里I・II式期の貯蔵穴、北陸からの搬入土器、石剣3、翡翠玉2、黒曜石・瑪瑙の剝片、植物残滓、各種石器などが出土している。

**7E地区：姉川流域地区E(58～63)** 姉川旧下流域の湖岸近接地を中心とする範囲で、泥がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。最も古いのは縄文中期前葉以降の資料(十里町遺跡(58)の土器片)である。高橋遺跡(60)では黒曜石のほか、縄文中期後葉の堅穴式住居複数棟・土壙などが検出され、住居には時期的に重複した痕跡が確認された。十里町遺跡(58)の自然流路からは縄文晩期後半から弥生前期後半にかけての土器が出土し、木製農具、赤漆塗り椀も伴出した。塚町遺跡(62)では縄文後期の資料のほか、

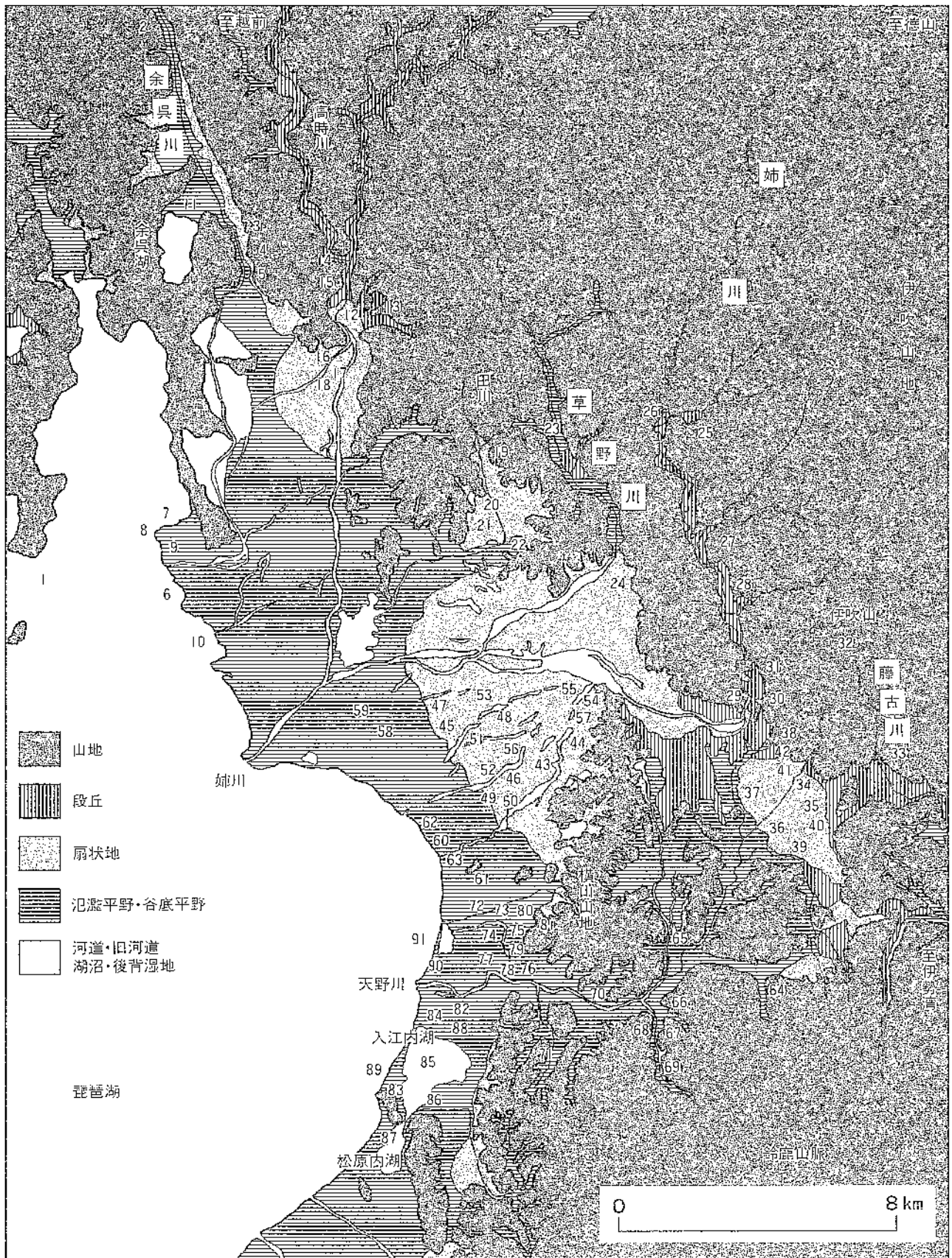


図1 湖北地域の遺跡分布

表3 湖北地域の概要

	遺跡名	所在地	概要	地区
1	葛籠尾崎湖底	湖北町尾上	①水深70mの湖底谷に位置し、縄文早期から晩期の各時期の遺物が出土する。搬入系土器（加曾利B式など）も出土し、完形品が多い。	1
2	柳ヶ瀬	余呉町柳ヶ瀬	①縄文中期の土器片。	2 A
3	坂口	余呉町坂口	①高山寺式土器出土。	2 B
4	黒田長山	余呉町坂口	①高山寺式土器出土。	
5	桜内	木之本町黒田	①宮滝式に類似する土器片のほか、八日市新保式、東北後期末土器（新地式～大洞B古段階）、石鏃、切目石鏃、敲石、磨石などが出土。	
6	延勝寺湖底	湖北町今西	①大歳山式、船元Ⅰ～Ⅲ式、里木Ⅱ式、北白川C式、北白川上層Ⅰ～Ⅲ式、一乗寺K式、元住吉山Ⅰ式、宮滝式、滋賀里V式。	2 C
7	尾上浜	湖北町尾上	①縄文後期（磨消縄文）とそれに伴う丸木船出土。丸木船は海洋型に近い形状。	
8	余呉川河口	湖北町尾上	不詳。	
9	今西湖岸	湖北町今西	不詳。	
10	早崎	湖北町海老江	不詳。	
11	余呉湖底	余呉町川並	①湖底埋没林泥中から宮滝式が出土。	3
12	古橋	木之本町古橋	①中期末の土器に伴い石棒、石皿、石斧、石鏃、多量の石鏃などが表採される。そのほか加曾利EⅠ式、里木Ⅱ式もみられる。石棒の直径は三寸二分。	4
13	上ノ山	木之本町石道	①縄文土器のほか石鏃、石斧などが表採される。そのほか上ノ山古墳墳丘から縄文後期土器が出土。	
14	川合	木之本町川合	①環状石斧2点（硬砂岩製・粘板岩製）、石棒1点（砂岩製、直径三寸）出土。	
15	栗谷	木之本町古橋	不詳。	
16	洞戸朱塚	高月町洞戸	①沼沢地的な土壌から、縄文晩期凸帯文土器、剥片が出土。	
17	井ノ口日吉	高月町井口	①日吉神社境内から石棒2本が出土したとされる。	
18	井口	高月町井口	不詳。	
19	北野A	浅井町北野	①晩期凸帯文土器。東海の五段森式に近い。	5 A
20	高畑	浅井町高畑	①砂岩製磨斧、石棒（長さ一尺五寸）。	
21	瓜生元	浅井町瓜生	①砂岩製磨斧、石棒（長さ一尺五寸）。	
22	木尾	浅井町木尾	①石棒。	5 B
23	草野	浅井町草野	①草野川川底から石棒出土（長さ一尺六寸）。	6 A
24	醍醐B	浅井町醍醐	①船元Ⅱ式～里木式、醍醐式。主体は醍醐式で立石を中心に据えた配石遺構、多量の石鏃、石鏃、石槍、石匙、石皿、敲石、凹石、石棒状石器などが伴う。剥片石器の石材はサヌカイトなどだが、黒曜石製の石鏃も含む。円礫群、角礫群、木炭層、焼土層も検出。	6 B
25	起し又	伊吹町曲谷	①縄文早期穂谷式。②縄文中期船元ⅠB・Ⅱ・Ⅲ式、里木Ⅱ式、北白川C式。③中津式、福田KⅡ式、北白川上層Ⅰ～Ⅲ式、元住吉Ⅰ・Ⅱ式。主体は②の北白川C式。	7 A
26	ムカイラ	伊吹町曲谷	不詳。	
27	内産	伊吹町上板並	①中津Ⅱ式、北白川上層Ⅱ式、元住吉山式、②滋賀里Ⅲ式、馬見塚式。主体は①の中津式。	7 B
28	長谷	伊吹町下板並	①石斧。	
29	伊吹	伊吹町小泉	①縄文中期船元式。②蛇文岩製の精製磨斧（長さ3寸5分）、緑泥片岩製の線刻石剣。	7 C
30	太平寺	伊吹町太平寺	不詳。	
31	峠平	伊吹町小泉	①石斧。	
32	伊吹山山頂	伊吹町上野	不詳。	8
33	上平畑	伊吹町上平寺	①石斧	9
34	東野	伊吹町弥高	①異型局部磨製石器が採集されている。	10
35	井の田	伊吹町大清水	①灰畑式、神明式、取組式、島崎Ⅲ式、山の神式、里木Ⅱ式、北白川C式、打斧、黒曜石剥片。②北白川上層式。	
36	杉沢	伊吹町杉沢	①中期後葉の土器。②滋賀里Ⅱ式期の中部山岳からの搬入土器、敲石、磨石、石皿、石刀、硬玉類似石材の磨斧、石冠状土製品。剥片石器の石材は安山岩、サヌカイトのほか、下呂石に類似する。③晩期後半の土器棺蓋群、石斧、石鏃、敲石、石棒、多頭石斧、御物石器。	
37	高番	伊吹町高番	①縄文に帰属すると考えられている硬玉製勾玉、石棒、敲石、石鏃、石斧。	
38	上野	伊吹町上野	不詳。	
39	村木	伊吹町村木	不詳。	
40	大清水	伊吹町大清水	不詳。	
41	野頭	伊吹町上野	不詳。	
42	人塚	伊吹町上野	不詳。	
43	八反田	長浜市八条町	①縄文早期末の上ノ山式土器出土するが、ほ場整備の際の客土中出土の可能性があり。	7 D
44	畑部西	長浜市畑部	①晩期後半の合口式土器棺蓋3基。	
45	川崎	長浜市中山町	①北白川下層Ⅱa式。②懸島式。③縄文前期の土壌。④縄文晩期後半～弥生前期（凸帯文土器・馬見塚式～水神平式。前期古段階の土器も多い。弥生前期中～新段階の環濠（三重）からは炭化米や農耕具の未製品など。それ以後のⅢ～Ⅳ式も出土する。	
46	宮司東	長浜市宮司町	①羽鳥下層Ⅰ式期の集石土塚2基。土塚の直径は2m、拳大の石を詰める。大量の炭化物を伴う。	
47	神照寺坊	長浜市新庄寺町	①石棒。不時発見のもので、形態から縄文中期のものと推定される。現存長60cm、直径11cm。	
48	野瀬	長浜市分田町	①縄文中期末の土器。	
49	柳町	長浜市大辰巳町	①縄文中期後葉の土器。	

	遺跡名	所在地	概要	地区	
50	室	長浜市室町	①縄文後期前葉から中葉の土器、埋設土器。	7 D	
51	山階	長浜市山階町	①縄文後期の土器のほか、当該期と思われる独鈷石（黒色粘板岩製）。		
52	宮司	長浜市宮司町	①中津新段階（未報告）、②谷地形部から滋賀Ⅰ・Ⅱ式期の貯蔵穴、八日市新保式、御登塚式、石剣3、翡翠玉2、石鏃・石斧・砥石・磨石・凹石・敲石（後三者が多い）、サヌカイト・砂岩・黒曜石・瑪瑙の剥片、食物残渣。③五貫森式～櫻王式、弥生前期前半・後半の土器。		
53	口分田北	長浜市口分田町	①自然流路に合流する「溝状遺構」から縄文晩期深鉢、舟形黒色磨研土器（浅鉢）、弥生前期の水神平式土器が出土。		
54	法性寺	長浜市垣籠町	不詳。		
55	墓立	長浜市東上坂町	不詳。		
56	正言寺	長浜市南田附町	突帯文土器。		
57	堀部	長浜市堀部	突帯文土器。		
58	十里町	長浜市十里町	①鹿島式（表探）。②縄文晩期凸帯文期～弥生前期の自然流路。堅持、鏃、木製赤漆塗り椀。		7 E
59	森	長浜市森町	①縄文中期後葉の土器。		
60	高橋	長浜市高橋町	①土壇5基。竪穴式住居S×1・2はいずれも2棟が重複し、本来は全て方形プランと推定。S×1からは東海地方の神明式が出土。ほか縄文時代に属するであろう黒曜石も出土。		
61	金剛寺	長浜市加田町	①縄文中期末の土器、②北白川上層Ⅲ期の土器。		
62	塚町	長浜市平方町	①中津Ⅲ式土器。②縄文晩期末～弥生前期の土器（長原式・遠賀川式土器・櫻王式・水神平式）、石刀、独鈷石。③弥生前期末に遡る方形周溝墓。同じく前期の瑪瑙や木製農具、未製品貯木遺構。	11 A	
63	下坂城	長浜市下坂中町	不詳。		
64	番の面	山梨町梓河内	①縄文中期末の竪穴式住居。方形プランで一辺4m。4本の主柱穴、中央の炉をもつ。石鏃のほか多量の石鏃が出土。その大半はチャート製であるが中部山岳産の黒曜石製も混じる。ほか三日月状石器、小形砥石あり。		
65	法泉寺	山梨町本郷	①滋賀Ⅲ式土器。		
66	三大寺	米原町枝折	①長原式の合わせ口式土器棺。		
67	朝倉A	米原町下丹生	不詳。		
68	朝倉B	米原町下丹生	不詳。		
69	江竜	米原町下丹生	不詳。		
70	岩井	近江町能登瀬	不詳。		
71	番場	米原町番場	①石棒。		11 B
72	狐塚	近江町高溝	①大川式とそれに伴う石鏃・石匙。また有舌尖頭器も出土。②直径10cmの石棒。③弥生前期新段階の土器。		
73	法勝寺	近江町高溝	①大川式、高山寺式、有舌尖頭器。②北白川下層ⅡB式。③船元Ⅲ式、勝坂式。④後期の磨消縄文土器。⑤晩期条痕文土器。		
74	高溝	近江町高溝	①羽島下層Ⅱ式、北白川下層Ⅱ式、諸磯B式。②船元Ⅲ・Ⅳ式、聖木式、炉畑式。③中津式、稲田KⅡ式、北白川上層Ⅱ式。④船橋式、馬見塚式。／そのほか土器片鏃、耳栓、有舌尖頭器、石鏃、石匙、敲石や剥片類が出土しているが、その帰属時期や素材については不詳。		
75	顔戸	近江町顔戸	①北白川下層Ⅱb式、大蔵山式。②船元式、里木式。③中津式。④馬見塚式。		
76	浄蓮寺	近江町顔戸	①中津Ⅰ式新段階、称名寺Ⅰ式C類、竪穴式住居、埋設土器、地床炉、石皿、礫石鏃（剥片石器はない）。埋設土器は4基で産内型と推定。地床炉は2基。このことから住居は6棟以上で単一型式内での回帰的な移動が考えられている。住居プランは正方形、5m四方。②突帯文土器		
77	黒田	近江町顔戸	①滋賀Ⅳ式、船橋式、磨石、凹石、石棒状石製品（石棒?）。		
78	埋塚	近江町箕浦	①縄文時代に帰属する可能性の高い小形の石棒(?)。		
79	山ノ前	近江町顔戸	不詳。		
80	一本木	近江町顔戸	多量の剥片の散布あり。石器製作地と推定されている。		
81	船崎山古墳群	近江町船崎	多量のサヌカイト剥片の散布あり。石器製作地と推定されている。	11 C	
82	大乾古墳群	米原町上多良	①縄文草創期の石器		
83	磯山城	米原町磯	①縄文時代各時期の土器が出土。ハッ崎Ⅰ式、猪沢式、新保式といった搬入土器を含む。石鏃、石匙、石鏃、楔形石器、石鏃、石斧、凹石、磨石、石棒。既に早期の段階で隠岐産黒曜石を搬入する。早期末埋葬人骨2体分で墓域はなく投棄に近い。早期の面は標高81m。		
84	筑摩佃	米原町朝妻筑摩	①縄文早期から後期の土器が出土する自然流路（ないし沼状遺構）。主体は船元式、北陸新保式・新崎式。石鏃、石匙、スクレイパー、石斧、石鏃、磨石、黒曜石剥片、新崎式に伴う河童型土偶も出土。中期前半の大形土壇もある。②晩期八日市新保式。		
85	入江内湖	米原町入江	①北白川下層Ⅱb式。②凹線文系土器。③凸帯文土器。そのほか、石鏃、石鏃、石鏃、凹石、磨石、磨斧、石棒、骨角製モリ。		
86	入江内湖西野	米原町磯	①羽島下層Ⅱ式、石鏃。		
87	松原内湖	彦根市松原町	①縄文中期中葉～後期後葉、晩期後半の各時期の土器に伴い、竪穴式住居、土壇墓、土器棺墓などを検出。丸木船、弓、篋状木製品、堅櫛、赤漆塗り耳栓、生駒産磨研土器、隠岐産黒曜石、下色石、石棒、半蔵木柱未製品などが出土。		
88	立花	米原町中多良	①船元Ⅳ式・咲畑式、醍醐式。②弥生前期中段階。		
89	磯湖底	米原町磯	羽島下層Ⅱ式が出土。		
90	世継	近江町世継	①滋賀Ⅲ式土器。		
91	土川湖底遺跡	近江町長沢	不詳。		



縄文晩期後半～弥生前期後半の土器と共に石刀、独鈷石を出土した。弥生前期には集落を巡る環濠や木製農具、それらの未製品貯木遺構が設営された。弥生前期末に遡る方形周溝墓も検出している。

8 地区：伊吹山頂地区(32) 伊吹山頂遺跡(32)が位置するが詳細は不明である。表層地質は石灰岩である。

9 地区：藤古川上流域地区(33) 伊吹山中から伊勢湾方面へ流れる藤古川上流の段丘面に位置し、表層地質は碎屑物からなる。上平畑遺跡(33)から石斧が出土する。

10 地区：伊吹山麓地区(34～42) 伊吹山山麓の扇状地を中心とする範囲で、碎屑物が表層地質の主体を占める地区。早期に伴うことの多い異型局部磨製石鏃が東野遺跡(34)で採集されているが、時期が確実な資料の出現は縄文中期後葉以降である。井の田遺跡(35)では縄文中期後葉の土器に伴い黒曜石の剥片が出土している。杉沢遺跡(36)では中期後葉の土器のほか、滋賀里Ⅱ式期の各種の道具に伴い、中部高地からの搬入土器、石刀、石冠状土製品、硬玉類似石材製の磨斧、下呂石の剥片が検出されている。また、隣接する高番遺跡(37)からは、時期不詳ではあるが縄文期に属すると思われる石器類や石棒、硬玉製勾玉などが検出されている。

11A地区：天野川流域地区A(64～71) 天野川中流に注ぐ各小支流の山中傾斜地や谷底平野を中心とする範囲で、礫がち堆積物が表層地質の主体を占める範囲。最も古い資料は縄文中期後葉の資料(番の面遺跡)である。番の面遺跡(64)では縄文中期末の竪穴式住居を検出し、4本の支柱穴や炉、多量の石錘や石鏃を検出した。石鏃の材の大半はチャート製であるが、中部山岳産の黒曜石製も混じる。そのほか番場遺跡(70)で帰属時期不明ではあるが石棒が発見されている。

11B地区：天野川流域地区B(72～81) 天野川下流域左岸の湖岸近接地を中心とする範囲で、泥がち堆積物が表層地質の主体をしめる地区。狐塚遺跡・法勝寺遺跡・高溝遺跡(72～74)などで有舌尖頭器が出土している。

帰属時期の確実な最も古い資料は縄文早期前葉の土器片(狐塚遺跡(72)・法勝寺遺跡(73))で、以後縄文

各期のものがほとんどみられる。狐塚遺跡(72)では大川式および石鏃・石匙を検出し、また時期不詳であるが石棒(直径10cm)の出土を確認した。また、弥生前期新段階の土器も出土している。高溝遺跡(74)では縄文前期前葉～後期前葉(中期前葉を除く)、縄文晩期後半の土器が出土し、帰属時期不詳であるが耳栓や各種の石器が検出されている。浄蓮寺遺跡(76)では後期前葉の竪穴式住居が検出され、単一型式内の反復的な移動居住が指摘されている<sup>130</sup>。黒田遺跡(77)では晩期後半の土器に伴い石棒状土製品や各種の石器を検出している。埋塚遺跡(78)では帰属時期は不詳であるが、小形の石棒を確認している。

11C地区：天野川流域地区C 天野川下流域右岸の湖岸近接地および入江・松原内湖周辺を中心とする範囲で、泥がち堆積物が表層地質の主体を占める地区。磯山城遺跡(83)では有舌尖頭器が出土している。最も古い時期の確実な資料は、縄文早期中葉(磯山城遺跡(83))で、以後各時期の資料がみられる。磯山城遺跡(83)では縄文時代全般にわたる痕跡がみられる。早期の段階で隠岐産の黒曜石が搬入され、また石棒も出土する。入江内湖遺跡(85)では石棒、筑摩佃遺跡(84)では縄文中期中葉の土偶が出土している。松原内湖遺跡(87)では縄文中期中葉～後期後葉・晩期後半に遺跡が形成され、また後期に属する石棒・小形土器・半載木柱の未製品<sup>131</sup>などが出土している。なお、弥生前期前半の土器が立花遺跡(88)で出土している。

### C. 段階の設定

有舌尖頭器が発見されている。これらがどの時期に帰属するものかは不明だが、かなり早い時期の活動を示す材料となるには違いない。湖北地域の場合、天野川下流域の氾濫平野・湖岸近接地で発見されている。既に述べたように、この地区は沖積の遅れた低湿地帯だったと考えられ、琵琶湖に接した地点でもある。水辺での活動が盛んだったことを想起させよう。

さて、縄文期の動向はどうであったか。以下では段階を設定しながら、諸事象の変化を把握してみたい(図2・表4～6)。

第1段階(縄文早期前葉～中葉) 2B・7A・11B・11Cといった4つの地区で活動痕跡が確認さ

表 4 湖北地域の遺跡の消長

遺跡名	地区	有否 尖頭螺	縄文早期			縄文中期			縄文後期			弥生・古墳		祭記遺構	稀少出土品	地形分類	表層地質
			前	中	後	前	中	後	前	中	後	前半	後半				
1 芝形尾崎湖底			○													湖底	
2 柳ヶ湖	2 A		○													段丘	礫がち
3 坂口	2 B			○												傾斜地	礫がち
4 黒田長山	2 B			○												傾斜地	礫がち
5 桜内	2 B										○					傾斜地	礫がち
6 延壽寺湖底	2 C					○				○						湖岸近接地	泥がち
7 尾上浜	2 C										○					湖岸近接地	泥がち
8 奈奥川河口	2 C															湖岸近接地	泥がち
9 今西湖岸	2 C															湖岸近接地	泥がち
10 早崎	2 C															湖岸近接地	泥がち
11 奈奥湖底	3											○				湖岸近接地	礫がち
12 古松	4														石椁	扇状地など	礫がち
13 上ノ山	4															扇状地など	礫がち
14 川合	4														石椁	扇状地など	礫がち
15 熊谷	4														石椁	扇状地など	礫がち
16 洞戸東塚	4															扇状地	礫がち
17 井ノ口H宮	4														石椁	扇状地	礫がち
18 井口	4															扇状地	礫がち
19 北野A	5 A															扇状地	礫がち
20 高須	5 A														石椁	扇状地	礫がち
21 瓜生元	5 A														石椁	扇状地	礫がち
22 木尾	5 B														石椁	扇状地	礫がち
23 草野	6 A														石椁	氾濫平野	礫がち
24 越前B	6 B														石椁	谷底平野	礫がち
25 越し又	7 A		○												配石遺構ほか	扇状地	礫屑物
26 ムカイテ	7 A														配石遺構ほか	山中傾斜地	礫屑物ほか
27 内産	7 B															山中傾斜地	礫屑物ほか
28 長谷	7 B															傾斜地・段丘	礫がち
29 伊吹	7 C															傾斜地・段丘	礫がち
30 太平寺	7 C														精緻磨片・石剣	土石流段丘	礫屑物
31 峠平	7 C															土石流段丘	礫屑物
32 伊吹山山頂	8															山頂	石灰岩
33 上平畑	9															段丘	礫屑物
34 栗野	10															扇状地	礫屑物
35 井の苗	10															扇状地	礫屑物
36 杉沢	10															扇状地	礫屑物
37 高畷	10															扇状地	礫屑物
38 上野	10															扇状地	礫屑物
39 村木	10															扇状地	礫屑物
40 大淵水	10															扇状地	礫屑物
41 野原	10															扇状地	礫屑物
42 人塚	10															扇状地	礫屑物
43 八反田	7 D			○												扇状地	礫がち
44 越前西	7 D															扇状地	礫がち
45 川崎	7 D					○										扇状地	礫がち
46 室司東	7 D															扇状地	礫がち
47 神原寺坊	7 D															扇状地	礫がち
48 野瀬	7 D														石椁	扇状地	礫がち
49 柳町	7 D															扇状地	礫がち
50A 室	7 D															扇状地	礫がち
50B 大辰巳	7 D															扇状地	礫がち
51 山崎	7 D															扇状地	礫がち
52 宮司	7 D															扇状地	礫がち
53 口分田北	7 D															扇状地	礫がち
54 法性寺	7 D															扇状地	礫がち
55A 墓立	7 D															扇状地	礫がち
55B 大塚	7 D															扇状地	礫がち
55C 越前塚	7 D															扇状地	礫がち
55D 南小足	7 D															扇状地	礫がち
56 正音寺	7 D															扇状地	礫がち
57 堀部	7 D															扇状地	礫がち
58 十郎町	7 E															扇状地	礫がち
59 森	7 E															氾濫平野	泥がち
60 高橋	7 E															氾濫平野	泥がち
61 金剛寺	7 E															湖岸近接地	泥がち
62A 塚町	7 E															湖岸近接地	泥がち
62B 堀部寺	7 E															湖岸近接地	泥がち
63 下坂城	7 E															湖岸近接地	泥がち
64 善の面	11A															山中傾斜地	礫がち
65 法泉寺	11A															谷底平野	礫がち
66 三大寺	11A															谷底平野	礫がち
67 朝倉A	11A															山中傾斜地	礫がち
68 朝倉B	11A															谷底平野	礫がち
69 江島	11A															山中傾斜地	礫がち
70 岩井	11A															谷底平野	礫がち
71 善徳	11A															谷底平野	礫がち
72 狐塚	11B	○	○													湖岸近接地	泥がち
73 法勝寺	11B	○	○	○												湖岸近接地	泥がち
74 高滝	11B	○				○	○	○	○	○	○	○	○			湖岸近接地	泥がち
75 戸戸	11B															湖岸近接地	泥がち
76 浄蓮寺	11B															湖岸近接地	泥がち
77 黒田	11B															湖岸近接地	泥がち
78 塚塚	11B															湖岸近接地	泥がち
79 山ノ前	11B															湖岸近接地	泥がち
80 一本木	11B															湖岸近接地	泥がち
81 磐崎山古墳群	11B															湖岸近接地	泥がち
82 大藪古墳群	11C	○														湖岸近接地	泥がち
83 磯山城	11C			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			湖岸近接地	泥がち
84 筑摩川	11C															湖岸近接地	泥がち
85 入江内湖	11C															湖岸近接地	泥がち
86 入江内湖野	11C															湖岸近接地	泥がち
87 松原内湖	11C															湖岸近接地	泥がち
88 立花	11C															湖岸近接地	泥がち
89 磯湖底	11C															湖岸近接地	泥がち
90 世塚	11D															湖岸近接地	泥がち
91 土川湖底遺跡	11D															湖岸近接地	泥がち

凡例：○=資料のみられるもの。◎=右記のうち稀少性のある石材や祭記遺構・遺物のみられるもの。⊙=いわゆる遠賀川式土器古・中段階の存在。

れる(図2-①)。これらは山地傾斜地やその裾部、および湖岸近接地に該当する。地形区分・表層地質からみた活動地点の傾向は2極的で、礫がちな山地4割、泥がちな湖岸近接地6割となり、これら2つの地形区分で主に活動していたことが想定される(表6-①)。明確な遺構や祭祀装置・稀少品といった「有り難いもの」は確認されていない。

**第2段階(縄文早期後葉～中期中葉)** 立地のほか、稀少品・祭祀装置・遺構の存在のあり方に変化が起り始める。

2C・6B・7A・7D・7E・11B・11Cといった7つの地区で活動痕跡が確認される(図2-②)。これは湖岸近接地や山地だけでなく、扇状地(早期後葉～)や氾濫平野(中期前葉～)にも活動痕跡が点在し始めたことを示している。地形区分・表層地質からみた場合、前段階にみられたような2極的な傾向は消える。山地が1割弱、扇状地2割弱、湖岸近接地が8割弱という比率に変化する。活動痕跡のみられる環境の拡大や比率の変化が起こっている(表6-②)。

また、遺構、稀少品や祭祀装置が存在し始める(46宮司東遺跡の集石土壙、83磯山城遺跡の黒曜石、84筑摩佃遺跡の大型土壙・土偶)。ただし、遺構は単に穴を掘った程度で、構造の単純なものに限られる。稀少品や祭祀装置は、湖岸近接地の11C地区のみで確認されている。

**第3段階(縄文中期後葉～晩期前半)** 活動痕跡数が増加し、稀少品や祭祀装置、遺構の存在のあり方に明確な変化が起こる。

2B・2C・3・4・6B・7A～E・10・11A～Cといった14の地区で活動痕跡が確認される(図2-③)。地形区分・表層地質からみた場合、活動痕跡のみられる環境のバリエーションは、前段階とほぼ同じだが、山地が2割弱、扇状地が3割弱といずれも前段階に比べ倍増している。湖岸近接地は5割程度に留まっており、圧倒的過半数を占めてきた第1段階・第2段階に比べ、減少傾向にある(表6-③)。

「有り難いもの」も明確に存在するようになる。祭祀装置は、12古橋遺跡(石棒)、36杉沢遺跡(石刀)、47神照寺坊遺跡(石棒)などで確認されている。そ

のほか、細かな時期を確定できない地点の例も含めるとほとんどの地区で確認されていることが想定され、分布上に偏りは見出しがたい。

また、稀少品の確認例も増加する。醍醐B遺跡<sup>24</sup>での黒曜石のほか、湖岸近接地での確認例がある(60高橋遺跡黒曜石)。そのほか、中部高地へ通じる河川沿い、伊勢湾に通じる地溝帯沿い(64番の面遺跡黒曜石)、天野川から伊吹山西南麓扇状地をおそらく湧水点に沿って横切って余呉川に至るいわゆる後の「北国脇往還」沿い(35井の田遺跡黒曜石)や、いわゆる後の姉川扇状地先端部沿い(52宮司遺跡黒曜石・瑪瑙)など、外部に至るルート上や近江内部の重要なルート上での確認例がみられる。

活動痕跡数の増加は顕著で、第1段階の時期別確認数が4～6、第2段階のそれが3～10だったのに対し、当段階は9～20と倍増する(表5)。

時期が確認できる遺構の数も急増する(24醍醐B遺跡立石を伴う配石遺構、50A室遺跡埋設土器、52宮司遺跡貯蔵穴、60高橋遺跡竪穴式住居、64番の面遺跡竪穴式住居、76浄蓮寺遺跡竪穴式住居)。前段階のものが、単に穴を掘った程度のものばかりだったのに対し、建物のように構造的・複合的な遺構もみられるようになる。

以上のように画期的な変化を見せる段階であるが、活動痕跡数の多い前半期(縄文中期後葉～後期前葉:20～16)と、大きく減少する後半期(縄文後期中葉～晩期前半:いずれも9)で細分すべきかも知れない。竪穴式住居など明確な構造を呈する遺構が前者に多く、後者にほとんどないことはそれを支持するだろう。

**第4段階(縄文中期後葉～晩期前半)** 活動痕跡数が30弱と更に大きく増加する段階(表5)。2C・4・5A・7B・7D・7E・10・11A～Cといった10の地区で活動痕跡が確認される(図2-④)。

地形区分・表層地質からみた場合、活動痕跡のみられる環境のバリエーションは、前段階とは様変わりし、山地や水持ちの悪い礫がちな地点の比率は、前段階に比べ減少する。砂がちの扇状地(4割強)と、泥がちな湖岸近接地(4割弱)を併せて約8割を占めるようになる。活動が確認された前段階の地形区分・表層地質立地は、バリエーションのあるも

図2-① 第1段階（縄文早期前葉～中葉）

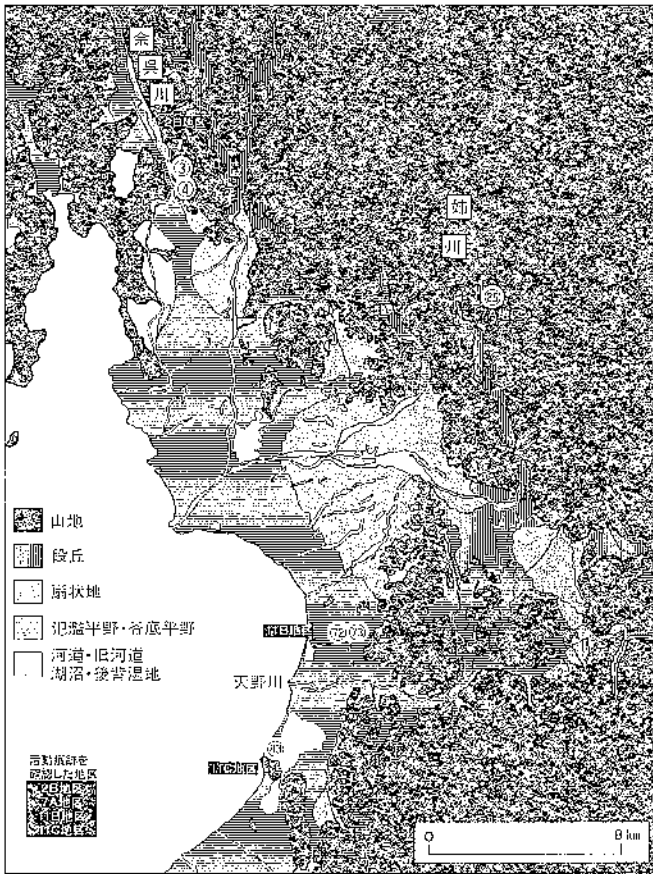


図2-② 第2段階（縄文早期後葉～中期中葉）

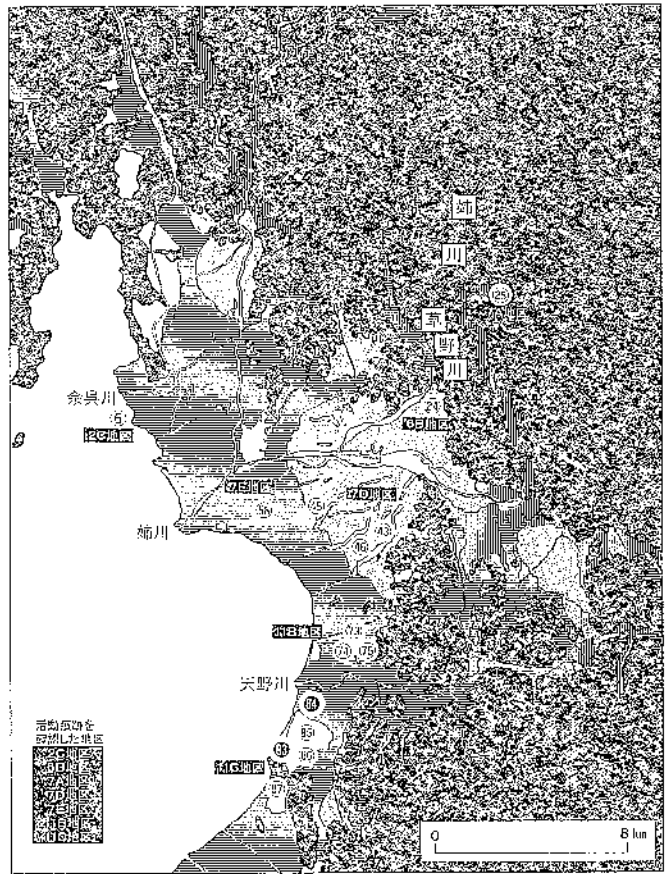


図2-③ 第3段階（縄文中期後葉～晩期前半）

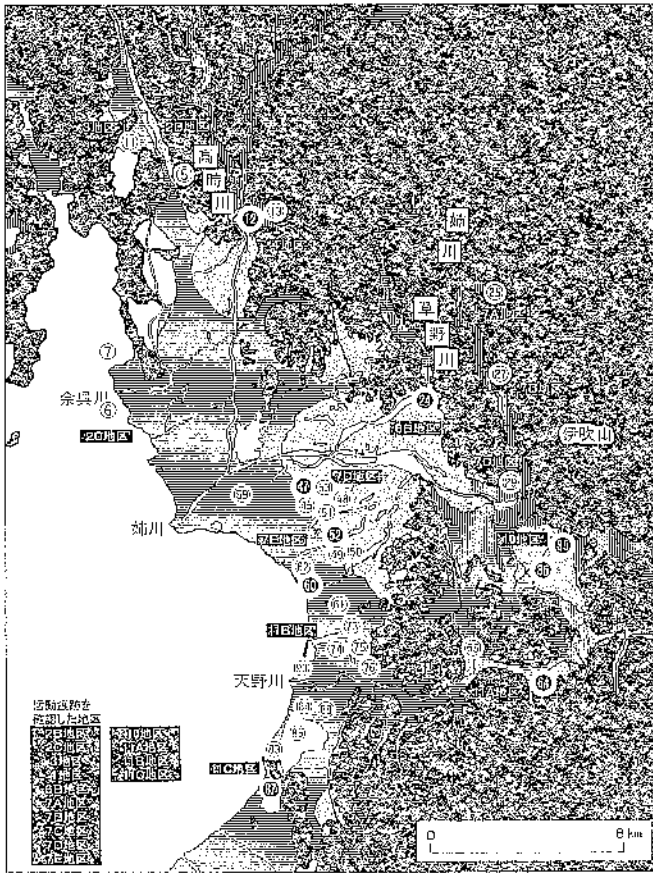


図2-④ 第4段階（縄文晩期後半・弥生前期前半）

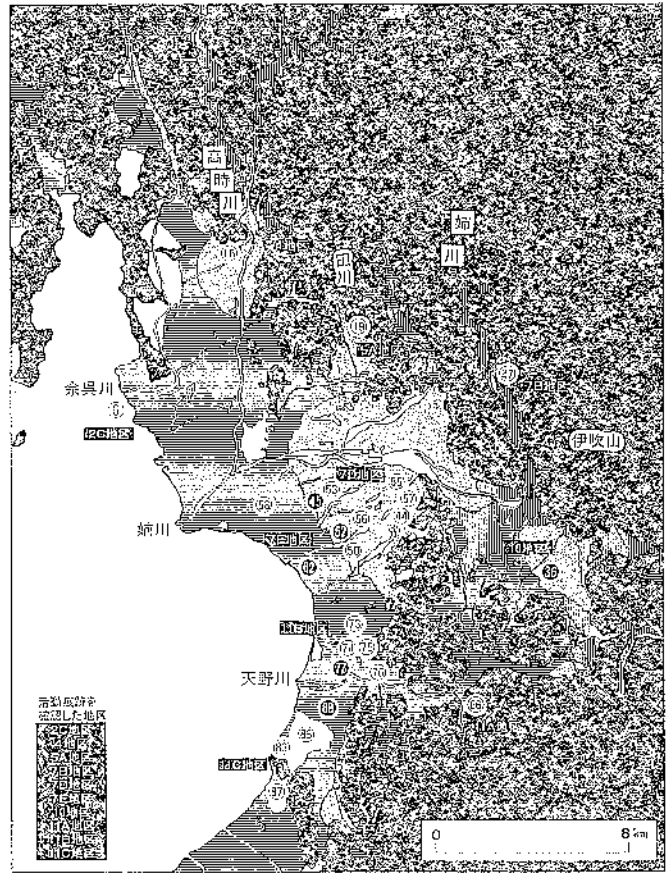


図2 各段階での分布（黒丸白抜数字は「有り難いもの」が点在する地点を示す。）

のだったが、それに比べ、比較的水持ちの良い地区で活動痕跡が目立つ(表6-④)。

前段階に引き続き、稀少品や祭祀装置といった「有り難いもの」は明確に存在する(36杉沢遺跡石棒・御物石器、62塚町遺跡石刀・独鈷石など)。これらは、第2段階における稀少品や祭祀装置の分布傾向と同様に、扇状地端部沿いのルートと主要河川の結節点(7D地区)、東日本との接点(10地区)といった交通の要衝や、湖岸近接地(7E地区)に偏って存在する傾向にある。

なお研究史上、弥生社会は稲作を主な生産手段とし、遠賀川系土器がその導入のメルクマールとして取り扱われてきた。その見解の是非は別として、遠賀川系土器前半期の土器の分布傾向をみておこう。出土が確認されているのは、45川崎遺跡、52宮司遺跡、62A塚町遺跡、88立花遺跡であり、これらは7D・7E・11C地区に属する。砂がち扇状地の湧水点列上もしくは泥がちな湖岸近接地といった水持ち・水回りの良い地区に分布が限られること、「有り難いもの」とほぼ同じ分布傾向にあることに注目しておきたい。

なお、遺構(36杉沢遺跡土器棺墓群、66三大寺遺跡土器棺墓など)もみられるが、土器棺墓に限られる傾向にあり、住居がみられた第3段階(特にその前半期)とは様相がやや異なる。

第5段階(弥生前期後半) 7D・7E・11B地区といった特定の氾濫平野・湖岸近接地でしか活動しなくなった弥生前期後半を第5段階とする(図3-⑤・表6-⑤)。

活動痕跡が長浜平野下部にほぼ集約していく中、規模の大きい設備投資(環濠の設営)、個人に対する労働投下(方形周溝墓の造営)が、その長浜平野下部で出現する。これらは労働力の大量動員を要する新たなタイプの「有り難いもの」であり、それまでとは傾向を異にする。そのほかの明確な祭祀装置や稀少品などは確認されない。

#### 4. 湖北地域における展開過程(予察)

以上、湖北地域における事象の整理を行った。これを成果の一つとして提示したい。事実関係において訂正・加筆する必要があればご教示願う。

次に必要なのは、展開過程に関する認識の深化、そのための仮説の提示、それを吟味するための課題の実践である。蛇足ながら、現状で記せることを試みに付け加えておこう。冒頭で述べた前提(1~2頁参照)や地理的条件に関する知見(2~3頁参照)に基づきながら、展開過程に関する認識(以下ゴシック体)を以下に記し、認識を深める上で必要な仮説と課題(以下明朝体)を併せて提示する。

##### [黎明期・第1段階]

湖北地域の黎明期には、主に湖岸近接地一帯で活動していた。遅くとも第1段階(縄文早期前半~)には、山地での活動も付け加わる。「有り難いもの」や遺構は、明確な形ではまだ存在しない。

##### [第2段階]

湖岸近接地に比重を置いた傾向は変わらないものの、縄文早期後葉を境に、扇状地での活動もみられるようになり、活動の対象範囲が拡大し始める。伊勢湾に連なるルートと琵琶湖岸ラインが結節した交通の要衝地でもある11C地区に限り、稀少品や祭祀装置といった「有り難いもの」が存在し始める。

##### [第3段階]

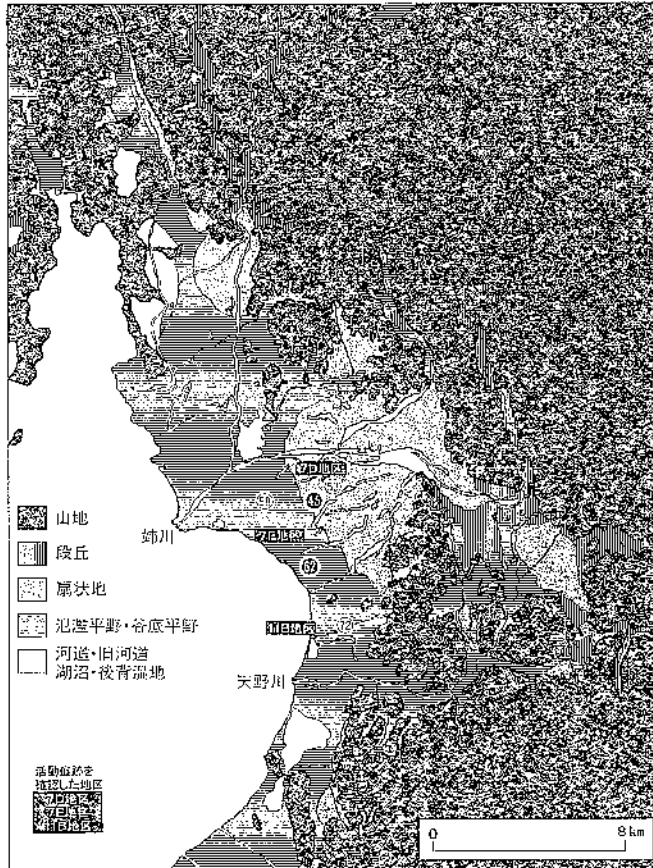
縄文中期後葉以降、扇状地での活動が大きく増加し、前段階からみられた活動対象地の多様化は一層強まり、活動痕跡数も大きく増加する。そのような傾向のもと、建物など構造的な遺構が明確に存在するようになり、また、祭祀装置や稀少品といった「有り難いもの」が各地区に存在する状況に至る。ただし、その後半期(後期中葉以降)、活動痕跡の数や、建物など構造的な遺構の出現頻度は大きく減少する。

##### [第4段階・第5段階]

縄文晩期後半・弥生前期前半に、活動痕跡数は再び大きく増加するが、数値で見ると、活動対象地の多様化傾向は一転し、山地や礫がちな地点は敬遠され、水持ちのよい地点に活動が集中するようになる。前段階にみたような、「有り難いもの」が偏く存在する傾向はみられなくなり、湖岸近接地が交通や流通の要衝に限って存在するに至る。

水持ちの良い地点への集中化と、「有り難いもの」の集中化といった傾向は、第5段階(弥生前期後半)で一層強まる。姉川下流域(7D・7E地区)、天野

図2-⑤ 第5段階（弥生前期後半）



(黒丸白抜数字は「有り難いもの」が存在する地点を示す。)

表5 時期別活動痕跡数

時期	活動痕跡数
縄文早期	前葉 2
	中葉 5
	後葉 3
縄文前期	前葉 3
	中葉 6
	後葉 9
縄文中期	前葉 6
	中葉 9
	後葉 19
縄文後期	前葉 15
	中葉 8
	後葉 8
縄文晩期	前半 8
縄晩後半・弥生前半	27
弥生前期	後半 0
平均	8.7

表6 各段階の傾向

表6-① 第1段階 (活動痕跡数=7)

	礫がち	砂がち	泥がち	計
山地	43			43
扇状地				0
氾濫平野				0
湖岸近接地			57	57
計	43	0	57	100

表6-④ 第4段階 (活動痕跡数=26)

	礫がち	砂がち	泥がち	計
山地	4			4
扇状地	◎ 8	⊙ 42		50
氾濫平野	4		4	8
湖岸近接地			◎ 38	38
計	15	42	42	100

表6-② 第2段階 (活動痕跡数=32)

	礫がち	砂がち	泥がち	計
山地	6			6
扇状地	3	13		16
氾濫平野			3	3
湖岸近接地			◎ 75	75
計	9	13	78	100

表6-⑤ 第5段階 (活動痕跡数=6)

	礫がち	砂がち	泥がち	計
山地				0
扇状地		◎ 50		50
氾濫平野			17	17
湖岸近接地			◎ 33	33
計	0	50	50	100

表6-③ 第3段階 (活動痕跡数=62)

	礫がち	砂がち	泥がち	計
山地	◎ 15			15
扇状地	◎ 13	◎ 16		29
氾濫平野	2		2	4
湖岸近接地	2		◎ 52	56
計	31	16	53	100

凡例：数値はパーセント表示した。

◎は「有り難いもの」の存在を示し、

⊙は遠賀川式土器古・中段階の存在を示す。

表7 デビッド・クラークによる各生態系の一次純生産量と食用生産物の比率(D.クラーク 1976)

	一次純生産量(gm-2 year-1)	一次純生産量における食用生産物の比率
低湿地・三角州・河口・潟	800~4,000以上	高い
海岸部・沖積平野・富栄養下の湖・河川流域	500~2,000	高い
浅海部・大陸棚・森林斜面・貧栄養下の湖・草原	200~1,500	並

川下流域(11B地区)に活動地点が集まり、そのような中、環壕といった大規模な労働投下や、方形周溝墓といった個人への労働投下がこの地点で見られるようになる。

【仮説1】

デビッド・クラークが指摘しているように、生態学上、低湿地は高い一次生産量を誇る(表7)。黎明期・第1段階・第2段階において、湖岸近接地での活動が比率的に高い理由は、この一次生産量の高さに誘引されたものと考えられる。湖岸近接地での活動は、その後も一定以上(2~5割)の比率で存在し続けており、この地点の重要性は、通じて一般的に高かったといえる。

一方、第2段階以降、扇状地や氾濫平野での活動が比率的に増加する傾向にある。湖岸近接地での活動痕跡は已然としてみられるので、琵琶湖岸を生活対象から除外した可能性や、除外せねばならないような水質などの悪化は想定すべきではない。むしろ、生活戦略の変換や技術上の変化によって適応範囲が広がり、扇状地なども生活対象範囲に組み込んでいった可能性、あるいは湖岸近接地以外の地形区分が沖積の進行などにより生活しやすい状況に変化した可能性を考えるべきだ。

【仮説2-①】

縄文時代中期以降、「有り難いもの」を「有し得る地区」と「有しにくい地区」の二項が、湖東地域や湖南地域で出現する。このような想定を筆者はした(註1①・②参照)。

湖北地域では、第2段階から第5段階にかけて「有り難いもの」が存在する。このうち、第2・4・5段階では、中部高地や伊勢湾に連なる主要河川や地溝帯沿い、もしくは近江内部の縦断ルートや琵琶湖湖岸ラインとそれら外部に通じる主要河川との結節点——つまり「交通・流通の要衝」と「一次生産

量の高い湖岸近接地」に限って存在しており、湖東・湖南の分析結果ともよく合致する。

しかし、第3段階は第2・第4・第5段階とは傾向が異なる。細かい時期の特定ができないものも含めた場合、ほとんどの地区で祭祀装置が存在していたことになる。つまり、二項構造を示すような分布上の偏りはみられないのだ。

この異質なあり方が何を示すのか。社会=経済上の仕組みや生活戦略が、湖東・湖南地域と根本から異なっていた可能性もある。しかし、それでは第2・4・5段階の湖北地域のあり方と湖東・湖南地域のあり方の類似性が説明できない。

そこで、中部高地に直接的に接していたことに原因を求めてみたい。当該期の中部高地は、多彩で多量の祭祀装置を保有していた。当時の湖北地域において普遍的に祭祀装置がみられる原因は、隣接する中部高地から受けたこのような文化的影響によるものである。文化的な組み合わせ=様式上の影響を色濃く受けた結果、湖東・湖南とは様相を異にするようになり、影響の供給元の衰退に伴い、受けた影響も収束する。中部高地の活動に勢いが失くなり次第、湖東・湖南と同様なパターンに戻り、交通・流通の要衝に限って祭祀装置が存在するようになるのだ。

以上のように、一時的に文化様式上の変異が認められるが、本質的には湖東・湖南地域と同じ原理がみられる。それではこの二項構造は何を示すのか。2つの可能性があげられる。

【仮説2-②】

ひとつは、社会=経済上の仕組みを指し示す可能性である。「有し得る地区」は、交通・流通の要衝に該当し、「有しにくい地区」は前者ほどの要衝とは言い難い。このことから、「有し得る地区」の活動地点は地域の中での集会所と流通の拠点であり、外界から流入するものはまずここで置き置かれたこと、分散

して生活している集落が祀りの時など機に応じて集約する時の核——母村的な集落として機能していたことが想定される。そして、「有しにくい地区」は、通常、分散して生活し、稀少品までは回ってこない集落が位置する。

敢えて言い過ぎてみよう。人・ものが集いやすい交通・流通の要衝に、「ありがたいもの（＝信仰や祭祀の対象）」が設けられ、そこに文字通り、なかなか「有り難いもの（＝通常存在しがたいもの＝稀少品）」が人と共にあつまり、「有り難いもの（＝大規模な土木施設）」が構築される。そういった図式をこの想定の特長線上に描くことも可能だ。「ありがたいもの」と「有り難いもの」の相関性は、現在の神社仏閣や諸々の祭りにもみられる。恐怖感や陶醉感を煽って、多大な資金を集約しては壮大さや荘厳さを演出し、「ありがたいもの」や「有り難い施設」を取り揃え、より一層ありがたいがられている新興宗教などはその典型だろう。

生きる上での信仰・祭祀を否定するつもりは更々ないが、宗教やシンボルというものはその根本に集約装置という機能を持ち、一種の再分配構造<sup>66</sup>を成立させる。この事実については、真正面から見据えて対処すべきと思う。国家のシンボルという集約装置に関わる国旗・国歌法案が一部で先鋭的に運用される流れの中で、現状と今後について、何をポイントにどう考えていくべきのか。歴史研究者を自認する以上、自他に問うてみたい。

それはさておき、西日本におけるこの種の再分配構造は、弥生時代中期以降、顕著になるものと思われるが、それは突然起こったのではなく、その萌芽はこの第2段階に現れ、静かに醸成していったとの想定もできる。社会像を復元していく上での想定の一つとして提示しておく。

#### 【仮説2-③】

いま一つは、居住形態という生活戦略上の仕組みから生じる差異が、二項として現れている可能性がある。

先の想定は、いずれの集落も定住していたことを前提とし、その仕組みの中での拠点的・中心的な集落と、衛星的な集落の二項を想定したものである。いま一つの可能性は、この「定住」という半ば思い

込みの混じった先験的な前提を否定した想定である。

例えば、回帰性の遊動居住形態を彼らが採っていた場合も、二項としての差異は現れる。交通の要衝や潜在的な資源に恵まれた一次生産量の高い地区に生活の拠点を設け、ここを回帰の帰結点とする。季節的な食料の通減に応じ、集団の一部や全部が食料獲得のために、旬が存在する地点に移動する。旬が過ぎれば、再び帰結点に戻っていく。

帰結点に当たる前者では、住居跡の重複や貝塚の形成といった生活の累積的な痕跡がみられるであろうし、生活に直結する行為だけでない、より複合的・総合的な活動痕跡が残るだろう。また、運搬できないような大きく重い道具や手の込んだ構築物が残されるだろう。幸運な場合、集落跡として我々は検出できる。

一方、一時的逗留先にあたる後者が、毎度同じである必要はない。例えば目的とする獲得対象物が豊富にある場所は、年によって違うことがままある。獲得圧を避けようとするならば、通減が起きないように同一地点での連続的な獲得はしなかっただろう。その場合、毎年同じ場所ではなく、あちこちに逗留する。しかも、一時的なキャンプだから、携行品も最小限で、地面に残す痕跡も散発的となる。結果として、我々には散布地としてしか認識できないのかも知れない。

以上のような結果、回帰の帰結点が「有し得る地区」として我々の目に留まり、季節的な移動の一時的な逗留先が「有しにくい地区」としてみえてしまう。このような想定もできる。

以上に提示した仮説2-②と仮説2-③では、財の形成状態や社会の複雑化の程度において、全く違ってしまふ。そういった意味では、この二項構造がいずれの要因の結果であるのか、あるいはこれらとは異なる要因に基づくものなのかは明確にする必要がある。今後の重要な課題の一つに挙げられよう。

#### 【仮説3】

活動対象地形区分の傾向を数値で示した表6でみる限り、多様な地形区分で活動していた第3段階から一転し、第4段階では水持ちの悪い地形区分の比率は下がり始め、より水持ちのよい地形区分へ活動対象地が集まり始める。その傾向は第5段階でさら



に強く現れ、分布図上でも明確に確認されるに至る(図2-⑤)。これは何を示すのか。

水持ちのよい地点しか活動対象にしていない第5段階の活動痕跡地では、農耕具の存在が確実に知られており(45・58・62)、この段階における水田稲作農耕は、従来指摘通り確実であろう。

第4段階に平行する時期には、北部九州をはじめとする幾つかの地域で既に水田稲作農耕が確認されている。明確な痕跡こそ検出されていないが、湖北地域の第4段階にもその可能性がある。比率上、水持ちのよい地形区分へ活動対象地が集まり始める背景——第5段階の立地パターンに近づく背景には、水田農耕導入の萌芽があると想定しておきたい。

#### 【仮説4】

M. サーリンズは、未開の民族を2つに分けた<sup>10)</sup>。一つは「過少生産型家族制生産様式」にある社会、他方は「生産が強化された家族制生産様式」にある社会である。この理論の整理、および考古学との協調の可能性については、別稿を期すことにするが、それぞれの社会の内容を簡単に記してみよう。

環境には産出高の極大点があり、また生産には技術的極限がある。それらより低く生産と欲求を留める社会が、前者の「過少生産型家族制生産様式」である。貧しいわけではなく、支配・被支配を根本から避けるが故に、搾取が存在しない。だから、生活に必要なもの以上を生産する必要も生じず、また他者から生産を強制されることもない。季節的・獲得圧による収穫過剰がウィークポイントなので、それを避けるための方策として、遊動居住形態を採り、それ故に重荷になる人員や財の随行はしないので、アイテムの質量はともに少なく、また人口密度も低い。

「生産が強化された家族制生産様式」は、首長を頂点とする社会で、階層を形成・維持するために、環境がもつ産出高の極大点や、生産の技術的極限のぎりぎりまで生産の強化が計られる社会である。贈与交換は受け取った者の負い目を引き出す。それを利用して従属関係を作り出し、階層化させていく。交換が重要なので、生産物はあればあるほどよく、生産は強化され、また稀少品や威信を導くものは一層珍重される。その結果、より多くのアイテムや、稀

少品や壮大な構築物を残すに至る。また、運搬可能な量より多くの所有物を持つに至るので、移動よりも、備蓄と定住居住が選択され、その結果、人口密度も高くなる。環境の産出高の極大点を大きく引き上げるために採用された場合、農業がこの生産様式の成立・維持・拡大に果たす役割は大きい<sup>11)</sup>。

一方、湖北地域の展開は如何なるものであったか。——第2段階を境に、生活対象地形区分が拡大し、「有り難いもの」や構造的な遺構が明確に確認されるようになった。手の込んだ作業が増えたのである。また、第5段階に至って水田農耕を採用し、環壕といった大規模な土木行為や方形周溝墓といった個人への労働投下がそれに伴う形で出現するようになる。

理論面と事象面の整合は、それぞれの細かな検討課題をクリアにしてから述べる必要がある。しかし、黎明期・第1段階が「過少生産型家族制生産様式」にあったこと、手の込んだ作業が増え、アイテムの増大がみられ始める第2段階は、「強化された家族制生産様式」が萌芽した結果であり、次第にその傾向を強くしていくこと、第5段階に至って、環境の産出高の極大点を大きく引き上げるために水田農耕が採用され、「強化された家族制生産様式」が確立したことを予察として提示しておく。

#### 【課題】

1. 地形変遷・気候・植生といった自然環境の変化と、考古学的事象の変化との関連性。この検討については、早々に別稿を期したい。
2. 生産形態に焦点を当てた検討。細目としては、獲得エネルギー源、獲得技術、アイテムの質・量などの実態と推移の把握、農耕の存在と内容の把握などがあげられよう。
3. 居住形態の把握。季節性の算定に有効な遺物や遺存体(貝類の成長曲線や獣骨歯牙の萌出状況など)の調査・研究に期待したい<sup>12)</sup>。

謝辞 着想にあたっては辻川哲朗氏との対話が大いに役立ち、事実関係の整理には中村健二氏のご教示を得た。また、資料の収集にあたっては丸山雄二氏・坂本正裕氏・西原雄大氏(以上長浜市教育委員会)・岩橋隆浩氏・鈴木康二氏にご

教示を得、作図においては大崎康文氏の協力を得た。感謝いたします。

なお、筆者らは近江貝塚研究会なる勉強会を1993年から開き、関西・東海・関東の若い研究者らと毎月討議を重ねている。財団法人大阪市文化財協会に所属されていた久保和士さんもそのうちの一人であったが、1999年5月に亡くなられた。久保さんはお忙しくされており、毎月の例会こそほとんど来ては頂けなかったが、財政難で苦しむ事務局に数枚の大枚をにこやかに差し出し、自由に使うよう言ってお下さったことは有り難く忘れがたい。また、ご専門の動物考古学で得た成果をお手紙や論文でこまめに教えて下さったりした。近江の検討が終わったら、河内潟周辺の傾向をうかがおうと思っていたのに残念である。これまでのお気遣いに感謝しつつ、ご冥福をお祈りしたい。――本稿を故久保和志さんの御霊前に捧げる。

## 註

(1)①瀬口眞司 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 地域の検討1. 湖東北部地域」 『紀要第11号』 1998

②瀬口眞司 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 地域の検討3. 湖南地域」 『紀要第12号』 1998

(2) これらの地域の遺跡のあり方に関しては先学による幾つかの見解がある。

①宮成氏は、長浜市内が標高100m以下の水はけの悪い低湿地主体であること、それが故に定着した稲作農業を経済基盤とする弥生文化を県内でもいち早く受容した地域となり得たことを述べている（後出文献一覧 52a）。

②丸山雄二氏は、最も古い遺構が縄文前期初頭（宮司東遺跡）と他所より遅れることや縄文後期までの遺跡がいずれも小規模なことから、縄文後期までの「長浜は、縄文人にとって生活しにくい場所であった」可能性を示しつつ、「狩猟採集中心から稲作へと代わる」縄文晩期に様相の変化が現れ、「水が豊富な低地での新しい村作り」が始まったことを推察した。（長浜市教育委員会『長浜市埋蔵文化財調査資料 第12集 1995』）

③天野川流域に関しては、中村健二氏が最も遡る縄文早期の遺跡の立地が磯山城遺跡（米原町）や法勝寺遺跡（近江町）といった湖岸に近い部分に限られること、縄文前・中期の遺跡も同様な傾向があること、縄文「中期の後半から晩期にかけては天野川や周辺河川が作り出す小さな自然堤防などに小規模な集落が営まれる」ことを指摘した（後出文献一覧76）。

④丸山竜平氏は、伊吹山周辺について、遺跡・遺物のあり方から共同体内の高度な分業、それに基づく共同体間の

計画的な季節的分業を推察し、それが縄文社会を発展・維持させてきたことを主張した。そしてその基盤となる自然環境の不順、琵琶湖水面の低下によって湖辺にその生業を求めていた人々は内陸に住まいを移し、山間部の住人は分散し、最終的に縄文社会における共同体は解体・衰退に向かったとした。その方法と解釈の結果は別として展開過程に対して具体的なアプローチを行ったことは評価されるべきであろう（丸山竜平「伊吹山麓の縄文社会とその解体」『堅田直先生古稀記念論文集』1997）。

⑤高橋順之氏は、伊吹山周辺について、早期の遺跡は「集落的な遺跡ではなく一時的なキャンプ地である」可能性を指摘している（後出文献一覧25）。

(3) 前掲註2の①参照。

(4) 地形区分・表層地質・遺跡の位置については以下の文献を基にした。まず地形区分については、ほかに「1:25,000 土地条件図 長浜」(国土地理院 1984)、「1:25,000 土地条件図 竹生島」(国土地理院 1984)を基にし、表層地質については『土地分類基本調査 長浜』(経済企画庁 1968)、『土地分類基本調査 彦根西部』(滋賀県 1981)、『土地分類基本調査彦根東部』(滋賀県 1986)、『土地分類基本調査 今庄・冠山・敦賀・横山』(滋賀県 1990)を参考にした。また、遺跡の位置については『平成7年度 滋賀県遺跡地図』(滋賀県教育委員会 1995)に基づいた。

(5) 後出文献一覧76参照。

(6) 縄文後期の丸木船と並んで出土した。丸木船の未製品として報告されているが、舳先に当たる部分まで削り抜かれてしまっていること、通常使われない堅くて重いヤマザクラを用いていることから未製品を否定する考えも併記されている。筆者は半截されている点から、金沢市チカモリ遺跡などの環状木柱列で使われている半截木柱の未製品と考えた。

(7) 共同体成員が共通に崇拝する超自然的存在（または神）と特権的に交流できる立場（王ないし首長）に、共同体成員からの財・労働力提供が集約し、そこから再び共同体成員に対して財・サービスが払い戻されるといったシステム（栗本慎一郎 1995）をここではその第一義とする。現代考古学では交易形態からアプローチしている。交易形態にはa) 玉突き式的交易とb) 交易センターを介する交易といった2つの類型が存在する。a) の場合は産地からの距離に伴い交易品の量が通減し、b) の場合は産出地からの距離とは無関係に交易品の多寡が現れるといった事象上の特性がある。b) の存在については、縄文時代の石材流通システムにおいて小杉康氏が指摘している（小杉康 「黒曜石産出地における採掘活動の復元―長野県磨山遺跡群の調査」『日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集』1994）。これらのこととRenfrewらの成果（Renfrew, Colin and Paul

Bahn :Archacology theories, Methodes and Practice, Thames and Hudson, London.1991) を踏まえた泉拓良氏は、b) のケースにおいて地域内での再分配や市場が存在する可能性を想定し、縄文社会にも集落間の階層差や首長制の存在を考える必要性を述べた(泉拓良 1996)。そこで、筆者も交易センター間の直接交易、交易センターへの物資の集約、それに基づく周辺集落への分配といったシステムの存在をイメージした上で、縄文社会における再分配原理の存在の是非を問うていきたい。

- (8) M. サーリンズ 『石器時代の経済学』 法政大学出版会 1984
- (9) 産出高を引き上げるために採用されるとは限らず、故に農業をするからと言って必ずしも社会形態まで変わるとは限らない(前掲註8第2章参照)。縄文農耕論を検討する際、留意すべき点であろう。
- (10) 近江においては、近年、貝殻成長曲線を用いた稲葉正子氏の検討(「第9章 動物遺体 第1節 貝類 4. セタシジミの貝殻成長線分析」[琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書1 粟津湖底遺跡第3貝塚(粟津湖底遺跡I)](滋賀県文化財保護協会ほか 1997)が優れた成果を上げている。単に生業カレンダーの復元といった問題意識に留まることなく、居住形態や生活戦略の把握へと昇華を試みるべきで、ますます展開すべき研究方向である。

## 文献一覧

参考・引用文献は以下の通りである。なお下記のほかにも、地理的条件の把握の際には、『滋賀県百科事典』(大和書房 1984)、『日本歴史地名大系第25巻 滋賀県の地名』(平凡社 1991)を参考にした。

- ・ D. クラーク 1976 Mesolithic Europe : the economic basis
- ・ E. P. オダム 1967 『オダム生態学』 水野寿彦訳 築地書館 株式会社
- ・ 泉拓良 1996 『歴史発掘② 縄文土器出現』 講談社
- ・ 佐々木高明 1981 「バイオアーケオロジーと先史農耕の存在形態」 『岩波講座日本考古学月報6』
- ・ 高橋護 1994 「縄文農耕と稲作」 『市民の古代 第16集』

そのほか、以下に記す文献や調査担当者の教示によって各遺跡の内容を整理することができた。なお、ここに付す番号は、文・図・表において各遺跡に付した番号と同一である。各市町村教育委員会については市町村名に「教委」を付した。また、県教委=滋賀県教育委員会、協会=滋賀県文化財保護協会、埋文=埋蔵文化財、だより=滋賀文化財だより、仮収納=文化財調査出土遺物仮収納保管業務、ほ場=ほ場整備

関連遺跡発掘調査報告書を示す。

- 1・『長浜市史第1巻』 1996
- 2・田中勝弘・宮成良佐 「38. 湖北地方の縄文時代遺跡」『だよりNo19』 1978
- 3・伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- ・余呉町教委編 『余呉町埋文発掘調査報告1』 1985
- 4・伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 5・伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 6・現在、筆者らが整理中。平成14年度報告書刊行予定。
- 7 a 滋賀県編 『滋賀県史蹟調査報告第一冊』 1928
- b 県教委・協会編 『仮収納平成元年度発掘調査概要』 1990
- c 県教委・協会編 『仮収納平成二年度発掘調査概要』 1991
- d 横田洋三 「縄文時代の丸木舟」『考古学ジャーナルNo 343』 1992
- 9・県教委・協会編 『琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要1』 1973
- 11・前掲文献2に同じ。
- 12 a 滋賀県編 『滋賀県史蹟調査報告第一冊』 1928
- b 『滋賀県百科事典』 大和書房 1984
- c 伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 14・滋賀県編 『滋賀県史蹟調査報告第一冊』 1928
- 16・高月町教委編 『高月町埋文発掘調査報告書第1集』 1986
- 17・前掲文献16に同じ。
- 18・県教委・協会編 『ほ場IV-2』 1977
- 19・浅井町教委編 『北野遺跡発掘調査報告書』 1980
- 20・滋賀県編 『滋賀県史蹟調査報告第一冊』 1928
- 21・滋賀県編 『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』 1922
- 24 a 小江慶雄 「琵琶湖湖底遺跡再考」『京都学芸大学報Ser A No 3』
- b 『滋賀県百科事典』 大和書房 1984
- c 伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 25・伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 27・伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第9集』 1994
- 29 a 滋賀県編 『滋賀県史蹟調査報告第一冊』 1928
- b 伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- c 伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 30・兼康保明 「213. 伊吹山山頂出土の石鏃」『だよりNo 191』 1993
- 32・前掲文献30に同じ。
- 33・滋賀県編 『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』 1922
- 34・伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 35・伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第6集』 1993
- 36 a 滋賀県編 『滋賀県史蹟調査報告第一冊』 1928

- b 『滋賀県百科事典』 大和書房 1984
- c 伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第2集』 1988
- d 伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第4集』 1992
- e 高橋順之 「231.平成6年度滋賀県下における発掘調査の紹介その2」『だよりNo210』1995
- 37 a 『改訂近江國坂田郡志』  
b 伊吹町教委編 『伊吹町文化財調査報告書第4集』1992
- 38～42・前掲文献30に同じ。
- 43 a 長浜市教委 『長浜市埋文調査資料第12集』 1995  
b 『長浜市史第1巻』 1996
- 44・長浜市教委 『長浜市埋文調査資料第12集』 1995
- 45 a 県教委・協会編 『国道8号バイパス分布調査報告』 1968  
b 県教委・協会編 『国道8号バイパス調査報告』 1971  
c 県教委・協会編 『国道8号バイパス調査報告Ⅱ』 1971  
d 前掲文献2に同じ。  
e 『滋賀県百科事典』 大和書房 1984  
f 音田直紀 「146.昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo114』1987  
g 丸山雄二 「164.昭和63年度滋賀県下における発掘調査の紹介その3」『だよりNo137』1989  
h 森口訓男 「173.平成元年度滋賀県下における発掘調査の紹介その2」『だよりNo148』1990  
i 坂本正裕 「194.平成三年度滋賀県下における発掘調査の紹介その3」『だよりNo170』1992
- 46 a 長浜市教委 『長浜市埋文調査資料第12集』 1995  
b 『長浜市史第1巻』 1996
- 47～48・『長浜市史第1巻』 1996
- 49・長浜市教委 『長浜市埋文調査資料第12集』 1995
- 51・前掲文献2に同じ。
- 52 a 長浜市教委 『宮司・十里町(宇十五町地区)遺跡調査報告書』 1977  
b 西原雄大 「204.平成4年度滋賀県下における発掘調査の紹介その2」『だよりNo183』1993  
c 『長浜市史第1巻』 1996
- 53・森口訓男 「164.昭和63年度滋賀県下における発掘調査の紹介その3」『だよりNo137』1989
- 58 a 前掲文献52 aに同じ。  
b 『滋賀県百科事典』 大和書房 1984  
c 森口訓男 「146.昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo114』1987  
d 長浜市教委 『長浜市埋文調査資料第12集』 1995
- 59・前掲文献52 aに同じ。
- 60 a 古川登 「164.昭和63年度滋賀県下における発掘調査の紹介その3」『だよりNo137』1989  
b 県教委・協会編 『主要地方道大津・能登川・長浜線道路改良工事に伴う高橋遺跡発掘調査報告書』 1990
- c 『長浜市史第1巻』 1996
- 61・『長浜市史第1巻』 1996
- 62 a 伊藤潔 「194.平成三年度滋賀県下における発掘調査の紹介その3」『だよりNo170』1992  
b 長浜市教委 『長浜市埋文調査概報第2集』 1994  
c 長浜市教委 『長浜市埋文調査資料第8集』 1994  
d 長浜市教委 『長浜市埋文調査資料第11集』 1995
- 64 a 『滋賀県百科事典』 大和書房 1984  
b 山東町教委 『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』 1986
- 65 a 山東町教委 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ法泉寺遺跡』 1986  
b 近江町教委 『近江町文化財調査報告書第17集』 1994
- 66・『183.平成二年度滋賀県下における発掘調査の紹介』『だよりNo157』1991
- 69・米原町教委編 『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 1984
- 71・前掲文献69に同じ。
- 72 a 中川通士 「146.昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo114』1987  
b 近江町教委 『近江町文化財報告1』 1987  
c 近江町教委 『近江町文化財報告18』 1995
- 73 a 前掲文献2および文献72 aに同じ。  
b 近江町教委 『近江町文化財報告1』 1987  
c 近江町教委 『近江町文化財報告6』 1990  
d 県教委・協会編 『ほ場XⅦ-1』 1990
- 74 a 近江町教委 『近江町文化財報告4』 1990  
b 県教委・協会編 『ほ場XⅧ-9』 1991
- 75 a 前掲文献72 aに同じ。  
b 近江町教委 『近江町文化財報告4』 1990
- 76・県教委・協会編 『ほ場XⅧ-9』 1991
- 77 a 近江町教委 『近江町文化財報告12』 1991  
b 近江町教委 『近江町文化財報告13』 1991  
c 近江町教委 『一般国道8号(米原バイパス)関連黒田遺跡試掘調査概報』 1992  
d 近江町教委 『近江町文化財報告17』 1994  
e 宮崎幹也 「194.平成三年度滋賀県下における発掘調査の紹介その3」『だよりNo170』1992
- 78・近江町教委 『近江町文化財報告8』 1991
- 80・近江町教委 『近江町文化財調査報告第1集』 1987
- 81・近江町教委 『近江町文化財調査報告第1集』 1987
- 83・米原町教委編 『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 1986
- 84 a 米原町教委編 『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 1984  
b 米原町教委編 『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』1989  
c 中井均 「173.平成元年度滋賀県下における発掘調査の紹介」『だよりNo148』 1990

- d 中井 均 「筑摩個遺跡・磯山城遺跡出土の中期前半東海系土器」 『第5回東海考古学フォーラム 縄文時代中期前半の東海系土器群』 1998
- 85・米原町教委編 『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』 1988
- 86・彦根市編 『彦根市史 上冊』 1960
- 87 a 浜崎悟司 「141. 昭和60年度滋賀県下における発掘調査の紹介その2」 『だよりNo108』 1986
- b 細川修平 「146. 昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介その2」 『だよりNo115』 1987
- c 吉田秀則 「178. 彦根市松原内湖遺跡出土の耳椀について――資料紹介』 『だよりNo151』 1990
- d 吉田秀則 「194. 平成3年度滋賀県下における発掘調査の紹介その2」 『だよりNo169』 1992
- c 県教委・協会編 『琵琶湖流域下水道彦根長浜処理区東北部浄化センター建設に伴う松原内湖遺跡発掘調査報告書』 1992
- 88 a 米原町教委編 『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』 1988
- b 米原町教委編 『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』 1988
- c 中井 均 「154. 昭和62年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」 『だよりNo125』 1988
- 89・現在、筆者らが整理中。平成14年度報告書刊行予定。
- 90・近江町教委 『近江町文化財調査報告第1集』 1987
- 91・近江町教委 『近江町文化財調査報告第1集』 1987

編集後記

今回は執筆者数が少なかったものの、縄文時代から中世までの論考、および平成11年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会で発表された基調講演をまとめ、文章化したものを掲載できました。

来年からは21世紀となりますが、これまで以上に文化財の調査・研究が行われ、世の中に「文化財の保護」の意識が広がっていくことを願っています。(T. S)

平成12年3月

紀要 第13号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780・9781

印刷・製本 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3番18号  
TEL(077)533-1241 FAX(077)534-0846